

東上（ひがしあげ）遺跡表採遺物検討会の概要

はじめに

東上遺跡は長崎市三重地区にあり、西海考古同人会の渡邊康行氏が高校生の頃に発見され、今でも氏が踏査を継続されている遺跡です。ここ数年、同氏は地元のNさんの自宅に隣接する畑を中心に表採しており、表採した遺物は500点以上にのぼります。その一部は、『西海考古』第12号に掲載された「長崎市三重地区・東上遺跡について」という論攷の中で紹介されています。

たちやとしあき

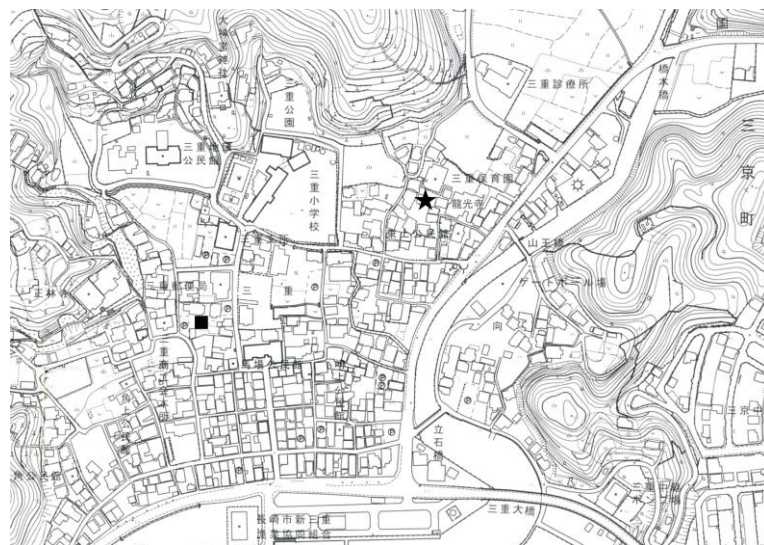
今回の遺物検討会は鉄製武器の若手研究者である唐津市教育委員会の立谷聡明氏をお招きし、表採遺物の中から鉄製品を中心に検討を行いました。

なお、西海考古同人会では急遽この検討会の開催を決めたため、周知の時間がとれず、参加者は同人会事務局のスタッフが中心となりました。

以下、簡潔に検討会の概要を記します。

- 1 日時 2023（令和5）年10月15日（日）8:30～12:30
- 2 会場 長崎市民会館第2会議室
- 3 表採地 遺物表採地は太平洋戦争中に防空壕が掘られた場所で、掘削に伴う廃土に礫と共に鉄製品や鉄滓などが含まれています。これらの遺物を含む廃土は耕作の妨げとなるため、土地所有者によって畑の周囲の数か所に集積されている状況です。
- 4 内容 遺物検討会では、立谷氏に鉄製品約50点を見ていただきました。その結果、刀子と思われるものや、釘状のもの、鉄素材、椀形滓、鉄滓、鞆の羽口片と思われる土製品などが確認できました。したがって、この表採地の下に鍛冶遺構が遺っている可能性がより高くなりました。同遺跡の時期は鉄製品の状況から、当初想定された弥生時代ではなく、上限は古墳時代、下限は表採された糸切り離しの底部から見て12世紀以降の中世と思われるが、強いて言えば、表採遺物に布留式土器に後続する甕形土器口縁部片があること、須恵器がないことなどから古墳時代前期後半から中期前半と推定します。

（文責：古門）



★が長崎市東上遺跡表採地（『西海考古』第12号より）



長崎市外海歴史民俗資料館にて



東上遺跡表採地にて



遺物検討会の様子



同上 右端は立谷聡明氏